第７００回番組審議会報告
２０２５年７月１日開催

■出席委員

佐藤卓己委員長、栗栖義臣副委員長、小川明子委員、川瀬慈委員、
小島幸保委員、曽我部真裕委員、津村記久子委員、長谷川豊委員

■毎日放送出席者

虫明社長、酒井常務、中野常務、髙山取締役、礒澤取締役、
奥田取締役、東田制作局長、京原制作部長、松原プロデューサー、
東野コンプライアンス局長、東郷広報部長、中西番組審議会事務局長

◆審議事項

テレビ番組「らくごのお時間」

「二代目桂惣兵衛　『近日息子』」（2025 年 6 月 8 日放送分）

「通に聞く！上方落語の魅力ってなに？」（2025 年 3 月 9 日放送分）

【参考素材】「桂雀々　追悼ＳＰ『代書』」（2024 年 12 月 8 日放送分）

【番組概要】

2013 年 10 月に放送がスタートした『らくごのお時間』は、“微力ながら上方落語の伝統の火を、後世まで灯し続けるお手伝いがしたい”　という願いから始まった落語番組です。これまで（今年 6 月時点）の１７１回放送で、のべ 191 席をお届けしました。基本構成は落語 1 席＆インタビューで、噺家さんのお人柄も合わせてお届けしています。

【各委員の主な意見は次の通り】

＊上方落語の魅力について知らないことがたくさんあったと気づかされてすごくいい番組だと思った。

＊落語家のプロフィールと落語の本編とインタビューがあるのはとても親切な作りだと思った。

＊福島アナウンサー、伊藤史隆さん、茂山宗彦さんの３人からは落語に対する深い敬意がすごく強く伝わってくる。落語に縁のなかった人もこの人たちがこれほど言うのだったら見てみたいと思うのではないか。

＊寄席の楽しみ方についてタイガースの選手に例えて「たまに外れもあるけど場外ホームランもある」と話すなど、トークがわかりやすいと思った。

＊同じ演題を違う人がやった時にどうなるのか、比較して見てみるのも面白いのではないか。
＊上方落語を世の中に継続的に広めて関心を高めるすばらしい取り組みだと思う。大阪は文化的にも経済的にも存在感をもっと発揮してほしいので、上方落語にさまざまな角度からさらに光を当てていただきたい。
＊放送局には落語のアーカイブがたくさんあるので、どのように伝統が引き継がれて、どういう形で変わって発展してきたのか解説する番組があってもいいのではないか。
＊放送で若手の落語家を継続的に育てていくことはとても意味のあることだと思う。スターをどれだけ作って輝かせるかという意味で放送局の役割はとても大事だと思う。
＊惣兵衛さんはすごく面白かったが、お客さんの反応が悪かったので、心から盛り上がれなかった。
＊放送の役割として伝統文化を残すことは重要なミッションの一つだと思う。上方落語は関西の伝統芸能の柱なので、在阪局として番組を続けていることは、局としての矜持を示し、公共性を担う意識があるという点ですばらしいと思う。
＊狂言など隣接した領域の芸の関係者ではなく、例えばスポーツ選手など全く関係のない分野の人を番組のゲストに迎えても面白いのではないか。
＊シングルショットをノーカットで延々と見せるのはパフォーマンスに対する深い理解と敬意があってこそのやり方だと思い好感を持つが、何かもう少し工夫が必要ではないかと感じる。
＊落語を知らない世代にどうやって知ってもらうかを考えていく必要がある。『らくごのお時間』のホームページで入門的な情報を見られるようにしておくと、初めて落語を見る人は入りやすいのではないか。
＊落語に興味を持った人のために、場所やチケットの買い方など紹介してもらえるとさらに寄席に行こうという気持ちにもなりやすいだろう。
＊１０代、２０代の若い人たちなのか、落語を聞いたことがない３０代４０代なのか、それとも高齢者なのかなどどういう人に見てもらうかで番組の作り方が変わってくるのではないか。
＊落語は耳だけでもすごく楽しめて、ラジオっぽい楽しみ方も十分できる。ポッドキャストを聞く若い人が増えているので、音声メディアを使ったら、落語ももっと若い人にも聴いてもらえるのではと思う。

【番組制作者側の説明、質問への回答】
＊年配層の方だけじゃなく若い方に見てもらうための演出と仕掛けを今後ます

ます大事に考えたいと思う。

＊見てもらうための工夫はもっと考えなくてはいけないし、アーカイブももっとうまく使える見せ方があるかもしれない。

＊私たち放送局が落語という伝統芸能を引き継いでいくために種をまく作業をやめてはいけないという思いを改めて強く感じた。落語界の皆さんと一緒にさらに大きなことができないかという視点を持ちながらコンテンツを作っていきたい。

以上